

---

# 生命の木

西武明

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

生命の木

### 【コード】

N9562C

### 【作者名】

西武明

### 【あらすじ】

太陽の光溢れる季節に、ある木が昔のことを思い出す物語。

他のみんなが忘れても、僕だけは覚えている。君が誰であるかを。九月。夜になれば、少し冷え込んでまだ寒い季節だ。だが、凍えるほど寒いという訳ではない。つまりはもつとも過ぎしやすく、生物が活動するにはちょうどいい季節だということ。僕は一年でこの時期が一番好きだ。太陽の光が一層柔らかみを帯びて、大地に降り注ぐこの季節が。大気中の全ての粒子が、まるで生命の存在を祝福するかのよう、輝いて見える。そしてそれに応えるように、あらゆる生物たちが、眠りから覚めて、喜びに満ちた歌を詠う。

この季節になると、必ず思い出すのは君のことだ。僕の意識は、大抵辺りに広がって、茫洋としているのだが 人間に言わせれば無目的、ということらしい この季節の冴え冴えとした光は、僕をゆっくりと覚醒させていく。全ての感覚が鮮明になって、世界が確かにそこにあるのだと、実感する。そうして僕ははるかな過去の記憶へと思いを馳せるのだ。

僕は少々長く生きすぎたかもしれない。いや、自分ではそう思っているのだが、本当の所は分からない。僕は、自分より長く生きた存在を知らないから。僕の知る他の生き物は、みんな僕の側を通り過ぎていく。僕よりも先に死んでいく。地を這う虫。空を飛ぶ鳥。そして、そのどちらでもある人間。そう、僕は人間が空を飛べるということを知らなかった。君が、あのとき、今と同じこの季節に、ここに来るまでは。

「やあ」

この季節特有の穏やかな太陽の光の下、君は古い友人に久しぶりに会うかのように、僕に挨拶した。僕は答えないが、君はそれを気にも止めず、言葉を続ける。

「君はずっとここにいて疲れないのかい」

僕にはそれが当たり前のことだから疲れることはないのだ、と説

明したかったのだが、それはできない。僕の声は、人間には聴こえないのだ。

「私は君みたいに忍耐強くないから、ここでずっと突っ立ってるってことは、できそうもない」

そう口にして、君は僕に向かって笑いかけた。

「それでも、今の季節なら、一時間くらいは耐えられるかな。うんざりするような夏の暑さの中では、絶対に無理だと思っけど」

仰向けになって、君は地面に寝転んで僕を見上げる。その視線ははるか僕の向こう、空へと向いていた。君はしばらくの間そうしていたが、唐突にこう呟いた。

「鳥は空を飛ぶ。鳩も、鳥もね」

君は指を立ててくると回しながら、そう言った。その言葉で、君の目線の先に鳥が飛んでいるのだと意識する。

「それはごく当たり前のことだ。だけど、人間だって空を飛べるのさ。君は知らなかったらう？」

君は僕に悪戯っぽい笑みを向ける。その笑みは、その年の人間にしては、随分と子供っぽいものに見えた。つまりは年不相応だ、ということだ。

「私は小さい時から、ずっとそう思ってきたんだ。空想科学小説の中の夢物語じゃないって。でも私がそう言ったびに、みんなは呆れたような顔をして、私を見てたっけ」

口元をほころばせて、君は言葉を紡ぐ。

「でも、私が実際空を飛んだときの、みんなの反応は実に見物だった。あの中で、君だけが本当のことを言っただって手紙を貰ったときは、とても嬉しかったな」

僕は静かに君の声に耳を傾ける。僕は言葉を返すことはできないが、君はそれでも満足そうにしていた。

それから、君はしょっちゅう僕の下へと来るようになった。君は空を飛ぶ機械。それは飛行機という名前らしい。について、実に嬉しそうに語った。時には専門用語が繰り出されて、何を言っ

いるのか、僕にはさっぱり分からなかったが、そのひときは僕にとって、本当に楽しい時間だった。

人間の間では、君のような格好をした者を伊達男、と言うらしい。君以外にも、ここを通る人間がいて、そう話していた。僕には人間の身を包む衣服の違いは分からなかったが、君が他の人間に好かれているのは、分かっていた。彼等が君について語るときの顔は、君が飛行機について語るときの顔と、そっくりだったから。

君は僕に多くのことを語ってくれた。その中でも、もっとも鮮明に覚えているのは、君のこの言葉だ。

「夜明け前が一番暗いってよく言うけれど、実はそうじゃないんだ。いつもここに立って世界を眺めている君なら分かるだろうな。生き物が目を覚ます少し前の、あの瞬間は、仄かな光が辺りに満ち満ちている。だから、一番暗くはないんだ。だけど、一番神聖な時間帯なんだよ。空気が清々しく澄んで、ぴんと鋭く張り詰めている。あの静謐さときたら！ そんなときに、空を飛ぶのは最高の気分さ」

そう言うってから、君は悲しそうな顔をして、視線を下に向けた。

「今はもう、昔みたいには、飛べないけれどね。体が思うように動かないから」

君は時折寂しそうに、どこか遠くを見ることがあった。表情を曇らせて、水平線の彼方を眺めるのだ。それは嬉々として飛行機について語る顔とは、明らかに違っていた。

「私が空を飛ばなければ良かったんだ。みんなが私を英雄扱いするが、それでどれだけの間が死んだ？ 私は人殺しだよ。直接手を下してはいないが、それは免罪にはならない」

そう暗い顔で、俯いて自身を責める君を見るのは、僕にとっても身を切るように辛かった。僕はそのとき君に言いたかった。君が空を飛ばなくても、他の人間がそうしただろう、と。君が全てを背負う必要なんかないんだ、と。だけど、それはできない相談だ。僕が君に話しかけることは、不可能だったから。

季節は移ろう。君はあれから何度ここへ訪れただろう。あるとき

を境にして、君の表情はだんだんと暗くなつていった。ここにずっと立っているだけの僕には理解できない。その憂愁を。その孤独を。僕は君を慰めたかったのだが、僕の声はやはり君には届かない。

「最近、体調が思わしくなくてね。みんなが、私に気を遣ってくれるのは分かるんだけど、肩身が狭いんだ。どうして私はこんなに駄目な人間なんだろうって思つてしまつて」

そう言つてから、君は弱々しい笑みを浮べる。

「でも、私はどうやっても、みんなの望む姿にはなれないらしい。みんなの思いに応えることはできないんだ」

呟く君の姿はいつもよりも頼りなく小さく見えた。

僕が君に最後に会つた日のことは、よく覚えている。その日はとても寒かつた。冬であつても、昼間からここまで気温が下がるのは、滅多にないことだ。吹きすさぶ風は異様に冷たく、冷気が身に染みだ。僕はその寒さに震え慄く。君は鬱々とした表情で、僕の前に立つた。それから、くずおれるようにして、地面にしゃがみこんで、呻き声を上げながら、君は慟哭した。

「私には生きることが重荷なんだ。どうして、人間だけがお互いに殺し合わなければならぬんだらう。君みたいに、誰とも争わずに生きていくことができたら」

その魂の底から絞り出されるような悲痛な叫びは、僕の意識をきりきりと締め付けるように苛んだ。僕は君の苦痛から目を背けたかった。それは僕にはどうしようもないことだったから。僕には君を救うことなどできない。

「嫌なんだ。嫌なんだよ、もう飛行機が人殺しの道具なんかに使われるのは。あんなことはあの大战で十分じゃないか。どうしてこの地まで血に染められなくちゃならない」

君は僕の身体に寄りかかるようにして、か細い声で、呟く。

「何か喋ってくれ、何か……」

それきり、君は来なくなつた。君が、首を吊つて死んだのだと知つたのは、それから大分経つてからだ。その死を悼んで、君が嘆い

ていた戦争は一時止んだらしい。人間が僕の下で、そう話していた。他の生き物は全て、僕を置き去りにして死んでいく。

それはいつものことだ。だけど、とても寂しかった。本当に長く生きてきて、そう思ったのはこれが初めてだった。

僕は基本的に、人間のように何かに祈るといふことはしない。それでも、この柔らかな太陽の光が、辺りに満ち溢れる季節には、君が確かにそこに存在したという記憶を、世界に留めておきたいと望むのだ。それは、やはり人間の祈るといふ感覚に似ているのかもしれない。人間がよくするように、神に縋すがる訳ではないけれど、この宇宙、この世界を成り立たせている、存在するといふその力の一部に、君を付け加えておいて欲しいと、僕は切に願う。それは僕の意識を超えたところにあつて、届かないものだけれど、僕はそれが確かにそこにあることを確信している。そして、それははるか遠い未来、僕が死んだ後に、誰かに語りかけるだろう。そうすれば、君は忘れ去られることはない。永遠に。

(後書き)

この話はもちろんフィクションですが、彼にはモデルがいます。ライト兄弟に比べて忘れ去られがちな、愛すべき飛行機野郎、アルベルト・サントス・デュモンです。季節の描写がおかしいのは、彼が晩年を過ごしたのが、ブラジル(南半球)だったから。分かりにくくてすみません(汗)

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9562c/>

---

生命の木

2009年5月16日21時46分発行